

花、ひと、こころ

入田文司

「この物数を極むる心、すなわち花の種なるべし。されば、花を知らんと思はば、まづ種を知るべし。花は心、種はわざなるべし」(世阿弥 風姿花伝 問答条々 花の段)

わざを窮めんとする努力、それが花の種だ。ならば花を知ろうと思えば、まず種を知るべきだ。花は工夫を凝らす心であり、種はその基礎となる鍛え上げたわざなのだ。と、世阿弥は言う。

この力感溢れる言葉を読むたびに、大学生の時分、私の卒業研究の指導教官であった教授の姿が思い浮かぶ。先生は、物質が磁石になる根本の仕組みを解明しようと、新しい学説を世に問うて奮闘する理論物理学者であった。大学内の自室に一人籠り、研究にひたすら邁進する日々で、数々の論文を欧文学術誌に発表していた。先生の学説は独自性が高く、真価を理解する人は少数であったので、「まだ努力が足りない。さらに説得力を高めなければ。」と深く論証を重ねていた。

先端の研究を走りながら、講義においては基礎的な科目にもかかわらず、「自分も、もう一度、勉強し直してココがおもしろかったよ」と難解な物理を少しでも楽しめるよう工夫されていた。

ある時、進路を考え始めた学生達に向かい「物理学を仕事にしようなんてね、こんなキツイ商売、キチガイでもなきやできないんだよ。」と告げられた。むろん、ご自身を含め物理学者の多くが気狂いだとの主張ではない。先生は学問という道の険しさと覚悟を伝えようとしたのだ。できることなら直接に物理に関連した仕事を、などヌクヌクと思索していた私は、この言葉を受け取った時から、自分が仕事を持つという現実と正面から向き合え、社会人へと脱皮する端緒となった。身近に先生の種と花に接した時は僅か一年。瞬く間に移ろう、巡り会いであった。

思えば、花と人は古来より歌われ、万葉集に次の歌がある事を知った。

「高山と海とこそは 山ながらかくも現うつしく 海ながらしか真まことならめ 人は花物ぞ うつせみの世人」(作者不詳 万葉集 三三三三二)

高い山、また広い海。山は確かに在り、海が在ることも真実である。比し

て、人は花物^{はなもの}。花も現世の人も移ろい永遠ではない、と。

大学を卒業して十数年後の春、先生が急逝されたとの報が突如届いた。在外研究に赴かれた矢先、朝方に倒れられ、手にはその日の講義原稿が握られていたという。まだ六十台の年齢、前触れ無き逝去ゆえ、ご遺族の悲しまれる姿は、言葉を失うよりなかった。告別式に参列した私は、実際にお会いする事はできないけれど、こころでの先生との対話は、ずっと続けるだろうな、と遺影を見ながら感じていた。

その後も、先生が魅せてくれた種と花は、私の内面で幹となり、苦しい時には、先生ならこの困難にどう向かうだろうと思ひ巡らせる。また自分が嬉しい時には、先生が満面の笑みを浮かべた日のことを思い起こす。それは、卒業研究発表の日。

「皆さん全員の一年間の勉強成果が聴ける。とても目出たい日だ。」と先生は上機嫌。打ち上げの席では、先生を困らせようと学生達が悪戯心でコールした「一曲歌って！」の声に、臆せず立ち上がり、先生の郷里の歌を張りのある声で歌われた。

逝去されて二十年を超す月日が流れたが、先生との心の対話は私を穏やかに豊かにしていることに気付く。

再び、万葉集を紐解くと、「わが園に梅の花散る ひさかたの天より雪の流れ来るかも」(大伴旅人 万葉集 八二二)、とある。

私が、先生との想い出を心に描き、この一文を書くに至るのも、天から何かの知らせがあつての事かもしれない。

また思う。ひとは真摯に生きる時、こころとおこないは花に似る、と。

(参照図書)

世阿弥「風姿花伝・三道」竹本幹夫・訳注 角川文庫

「世阿弥芸術論集」田中裕・校注 新潮日本古典文学集成

桜井満「花の民俗学」講談社学術文庫